

白磁製マリア観音像の調査報告と作品制作

東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程

美術専攻 先端芸術表現領域

学籍番号 1318928

原 千夏

要旨

本論は、筆者が2014年から2022年まで8年間にわたって継続してきた白磁製マリア観音像の調査報告と、調査に基づく作品制作について論じるものである。

一般にマリア観音像は、中国で作られた観音菩薩像を日本の潜伏キリシタンが聖母マリアに「見立てた」像であると思われてきた。禁教時代の潜伏キリシタンが信仰を維持し、宣教師による信徒発見の礎となったきわめて重要な信仰対象物であるにも関わらず、日本各地に点在する作例を包括的に記録した研究は乏しい。このため筆者は、実地調査による情報アーカイブの作成と、生産地や輸入経路についての基礎研究を行った。

第一部では、現在マリア観音像について述べられている説が定着するに至った経緯を探究した。さらに、東京国立博物館が所蔵する37体の白磁製マリア観音像と、実地調査によって集成した7都道府県・27ヶ所に点在する約36体の作例を合わせ、編年と生産地について考察した。白磁製マリア観音像の多くは、中国・福建省徳化窯で製造され、黄檗宗の僧侶の渡来とともに日本に流入したと考えられている。いっぽうで近年の研究により、徳化窯でヨーロッパ向けに製造された「ブラン・ド・シーヌ (Blanc de Chine)」の一部に、聖母マリアの影響が見られる白磁観音像があることも明らかになった。さらに潜伏キリシタン組織が多く存在した九州北部において、遅くとも17世紀末には白磁製の彫刻物を製造する技術があったことから、国内で生産が行われた可能性を示した。

第二部では、調査に基づく作品制作の手法と、記憶の継承について考察する。筆者は長崎県に生まれ、幼い頃から潜伏キリシタンや原爆の記憶が身近にあった。戦争体験を親族から聞くことも多かったが、その記憶は当事者の死とともに永遠に失われてしまう。個人やものの記憶が、小さな過去の断片として大きな物語に編み込まれてゆくのではないかという危機感は、調査を継続する動機となっている。第2章では記憶の定義を行な

った。ドイツの文化学者アライダ・アスマンとヤン・アスマンは、モーリス・アルヴァックスの記憶理論を受け継ぎ「文化的記憶」の概念を生み出した。「文化的記憶」とは、社会集団における模範的なストーリーの「機能的記憶」と、それ以外の忘却されたもの、潜在的なもの、無意識的なものである「蓄積的記憶」に分けられる。美術作品は、社会集団の「機能的記憶」からこぼれ落ちた「蓄積的記憶」を拾い上げることができる。他方、学術調査や社会集団へのアプローチなどの「機能的記憶」は、美術作品の理論的支柱となる。人類学の研究手法とも近似するリサーチやフィールドワークにもとづいた作品は、この両者を備え持つことが可能であり、社会の中における記憶の流動的な機能を可視化し、過去の事象を批判的に検証することを求められている。

1989年の「大地の魔術師たち」展以降、西洋主導の現代美術の世界にマルチカルチュラルな動向が芽生え、それに伴って起きた2000年代頃の民族誌的転回（エスノグラフィック・ターン）によって、リサーチに基づく作品制作が一般化し、民話や伝承などを着想の源とする作品が目新しいものではなくなった。日本では、芸術祭の隆盛がこれらの作品の制作機会を増やしたが、作品の増加に伴い、類型化と質の差が見られるようになった。第4章では、リサーチやアーカイヴの手法を効果的に用いている現代美術作家を年代ごとに分析した。1930～1940年代に生まれた中谷芙二子とクリスチャン・ボルトンスキーは、アーカイヴの手法などを用いて「不在の存在」を顕現させる。1950～1960年代のフランシス・アリスやジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラーは、音や映像によって白昼夢のような世界観を生み出し、社会的・政治的問題を誰もが共有可能な出来事として提示する。1970～1980年代に生まれたアピチャッポン・ウィーラセタクンや山城知佳子は、自分自身や役者の身体を通して「新しき語り部」として土地の記憶を伝える。

第5章では、前述の世代のあとに生まれた筆者の過去作を分析し、博士学位審査提出作品《空想の大陸－記憶の岩－》について論じた。筆者は、絵画からパフォーマンス、写真へと表現手法を移行し、最終的に複数の媒体を用いたインスタレーションを制作した。マリア観音像の写真を展示するとともに、音と映像によって信仰を育む風土を重層的に提示し、展示室に足を踏み入れた人々が、記憶の体験者として作品に含みこまれる空間づくりを行った。結論として、リサーチの手法に基づく現代美術作品は、対象物の社会的イメージという「機能的記憶」の更新と、周縁の「蓄積的記憶」を伝え、作品内で扱われている主題だけでなく、鑑賞者が過去や未来の出来事について思索する場を生み出す可能性を示した。